



母のおもかげ

『一日一回おさづけ』より

芝 光男

『母と私』

芝 光男

父出征

『一日一回おさづけ』の中で、最初に、

母・芝ふみが出てくるのは、母が実父・甚

之助とともに、二歳になったばかりの長

女・和子といっしょに父・太七の出征を見

送りにいくところである。(40ページ)

母の言葉そのものは書かれていない。だ

から、父の出征のこの場面では、母がなん

と言ったかわからない。昭和十四年一月に

結婚した父と母が、結婚したところ、ど

んな夫婦であつたのかわからないし、結

婚してまだ四年しか経っていないから、推

測もできないのである。

おそらく、母は父に対してそうであつた

ように、祖父に対しても全幅の信頼を置

いていただろうから、祖父の横にいて、黙っ

てうなずいていただけだろうと思う。

母が出直して、二十年。実は、私にとつ

ての母は小うるさい姿しか思い浮かばないのである。きつと母は、落ち着きもなくやんちゃな私が心配でならなかったのだろう。心配より、「危なっかしくて」仕方なかったのだろうと思う。

父生還

そして敗戦。父は酷寒のシベリアから奇跡的に生還。

母は、他の人々とともに、当時の丹波市駅（現天理駅）のプラットホームで父を出

迎えた。（本文41ページ）

父は、母が旦那さんの五年ぶりの帰還を、着物姿か特別着飾った姿で出迎えてくれる、と思っていたようだ。ところが、母は天理教という文字の入ったハッピとカスリのモンペ姿で出迎えた。

そこで、それまで、帰還したら芝家の再興と官庁への復職と職務の遂行とと思っていた考えを改め、その母のハッピ姿から「天理教になろう」と決意したのだった。

父は、留守中の様子を聞いて驚いたろう

と思う。五年の間に、芝家の様相は一変していったからである。

しかし、天理教には大反対であり、最も嫌っていた父・太七が、シベリアから生還して、短期間のうちに入信し布教師となっていたのは、なぜか。やはり、母の信仰によるが、母の信仰の礎となったのは実父・芝甚之助からの信仰である。

甚之助

そもそも芝家の信仰はいつからなのか。

甚之助は、明治十六年、現在の大和郡

山下三橋（しもみつはし）に生まれ、幼名を勇治と名乗り、その父は八尾伊三郎。

その妻（勇治の母）の身上から入信である。明治二十二年ころである。

勇治はのちに現在の郡山高校に在学中、剣道の稽古で頭痛に悩まされるようになり、父・伊三郎のすすめもあつて、所属の治道大教会に住み込み、頭痛をご守護いただいた。その喜びは大きかったようで、後年よく人に語っていたという。これが甚之助の入信でもある。

そして、明治末年、縁あつて芝家に養子に入り、商売人となる。まもなく大正四年、「六代目芝甚之助」を継承し名乗り、十八世紀中ごろに創業したと思われる「芝甚商店」を最も隆盛に導いた。

甚之助は八尾家を離れてからも、信仰者として治道大教会には公私ともにつなぎつづけ、昭和四年には治道大教会初代会長が六十一歳で出直したあと、推されて二代会長となった。

商売と布教、二股をかけるような甚之

助ではなく、男の子が育たない、夫婦は添い遂げられないという芝家の因縁を自覚して、昭和六年ごろ、「芝甚商店」の廃業を決意した。家内中だけでなく、同業者、大阪商工界がその決断に驚き、多くの方が翻意を促しただろう。しかし、祖父の決意は固く、廃業となった。

現代では、こんな社主の勝手による廃業は許されない。今なら、社員から突き上げにあい反対に解雇されるだろう。

大阪乾物商店史によれば、次期社長候

もしれない。

いつ、どんな時であつたかは忘れてしまつたが、私は母に、「祖父が家業を廃業して、店も無くなつてしまふという時、どんな気持ちやつた？」と訊いたことがあつた。

「尼さんになるような気持ちやつた」と、その時の母の答えであつた。おそらく、その母の答えに私は満足して、あとをきかなかつたし、覚えていない。もつと詳しく聞いておけばよかつたと思う。

しかし、納得したのはさもあらんと思つ

たからである。いわば、良家、金持ちの娘

として、女中や奉公人たちにかしずかれて育つた母である。それが、店は無くなり、親しくしていた使用人、はては出入りしていた人たちもいなくなり、きつといいしれぬ寂しさと孤独感を味わつたに違いない。まさに頼りとするは実父だけとなつたであらう。

のちに甚之助の五十年祭を勤めたとき、祖父が出直した前後のことを訊いた時、

母は「全く覚えてない。悲しくて悲しくて

…」と言っていた。

その時、母は絶望的な思いであつたらう。

さて、私の話である。

母は気弱であつた。気丈にひとりで、荊の道を掻き分けていくタイプではない、弱弱しく他者にすがりつき、お願いします、お願いしますと頼つていく女性であつた。

私は、昭和二十八年の十月に生まれた。そのころ、父と母はどのような状態だつたのだろうか。

それが、戦争中から戦後、子どもを次々亡くし、頼りとするものを奪われ、そして最も頼りとする実父を亡くすのである。孤独感と寂しさはいかばかりであつたかと推察するのである。

父が五百円と二升の白米を持って本格的に大阪に布教に出てきたのは、修養科の専任講師を辞めたあくる日、昭和二十六年五月一日である。

前年の九月に大阪の長柄に神様をお祀りして、そこを拠点に本格的に布教を始

めたのである。

そのころ父と母は、「勇躍」布教に励んでいた、とはいえ、心は沈んでいた、と思われる。それは、前年の二十七年五月に、私と会長の間の次男「文治」が出直しているのである。

のちに、父はこの文治の出直しについて、「美しい人形のようなだった。最も辛かった」と言っていた。母からは何も聞いていないが、話すのも辛かったのだろう。

私も難産であった。

母は心臓衰弱、産まれたのはいいが、出産後、母は意識が混沌となり、赤ん坊の私は血液中の酸素が不足して、皮膚が変色するというチアノーゼの症状を繰り返す状態であったが、なんとか母子ともに死の淵から脱したのである。

母はその中、父と合流するために大阪にやってきた。必死であったろう、命がけであったろうと思う。(169ページ)

そんな中、文句ひとつ言わず黙々とついて行った母も母だが、よくぞ連れて通った

父も偉大であつたと思う。

私は成人してから、就職か進学かと判断するころ、うちでは両親は何も言わな

つていたからだろうし、道一条となつても次男・文治を失わねばならない苦しさを経験したからであろうと推測する。

かつた。母はずつと、兄にも私にも「体が元気であること」しか言わなかつた。どこに行こうが何をしようが、母には「健康でさえあつてくれれば……」その思いしかなかつたのだと思う。

私の名前の命名は二代真柱様である。なぜ「光男」という名前がついているのか、私は五十歳を過ぎるまでわからなかつた。関心もなかつたからだが、ある時、ふと、その疑問を口に出したとき、傍にいた友人が「そら、三番目の男やからやろう」と

戦後すぐには頼りとしていた実父をも失い、一時は天涯孤独となつた辛さを思い知

言つたのに、なるほどと納得したのである。父は「良い名前やなあとと思った」と話してい

た。

母からのおさづけ

私が母の思い出で、最も強く残っているのは、母から受けた「おさづけ」である。

確か小学校の五年生の時だったと思う。

私は大変な腹痛をおこした。原因は何だったか、わからない。

その時、母と私は二階にいた、そして、

母は私に「おさづけをしてあげよう」と言った。私はとにかく腹痛をはやく治してほしいから「して、して」と言った。すると、母

は「してあげよう。ではこれからなんでもハイハイと言う事をきくか!」と言った。私は、痛いのがつらいから「聞く聞く」と言ったら母が取り次いでくれた。

不思議! 終わったとたん、私のお腹の痛みはすつきりと治った。これが、私の「おさづけ体験」である。こんなに鮮やかにご守護いただいたのは、これつきり、である。

この経験は大きく、現在憩の家で、事情部講師として、たくさんの方々に取り次がせていただいているが、その底にある「き

つと、ご守護くださる」という自信は、母
たろうと思う。

から取り次いでもらった、たった一回のお
さづけの鮮やかさである。
実際、私はこの入院で母が出直すとは
思っていなかった。なぜなら「元気」であつた
から。一週間の入院中、私が様子を見にい

最後の日々

さて、母は平成十三年、二十一世紀の
最初の年の九月二十九日に八十九歳で出
直した。数え九十歳であつた。一週間前に、
ほどであつた。

憩の家に入院した。何かの病名が付いたわ
けではない。いわば「老衰」で、生涯病弱で
あつた母である、せめて末期は痛みも苦し
みもなく、という神様からのお慈悲であつ
出直す二日前は、本部の秋季霊祭で、
車イスに載せてもらつて看護師さんの世話
で参拝もし、風呂にも入れてもらつていた。
毎日見舞いに行つていた私は「それは、よ

かつたな」と言い、看護師さんにもお礼を
言っていたし、退院が近いので、詰所のどの
部屋を母の居場所にしようか相談もして
いたほどである。

しかし、二十八日、容態急変、午後にな
って報せを受けた会長ほか、孫や子ども、
寄れる人が枕辺に集まりみなで最後の声
をかけたのだった。

皆はいったん帰り、二十九日深夜、母は
孫の潤子と玲子に看取られて出直したの
である。八十九歳、数えで九十歳であった。

まさに、芝家を影で支えた「中興の祖」
である母の勇退であった。



母のおもかげ

『一日一回おさづけ』より

著者

芝 光男

発行者

はるのひ分教会

発行日

令和3年9月23日